

前奏	トーンチャイム	讃美歌	119 羊はねむれり
讃美歌	114 あめなる神には	聖餐式	
祈禱		讃美歌	207 主イエスよ、こころ
信仰告白	使徒信条 566	献金	トーンチャイム
聖書	サムエル記上 15:22 ルカによる福音書 2:8~21	讃詠	547 いまささぐるそなえものを
讃美歌	109 きよしこのよる	黙禱	
説教	『降誕のこだま』	主の祈り	564
祈禱		頌栄	543 主イエスのめぐみよ
		祝禱	後奏

「羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた(ルカ 2:8)」。そこにまばゆい光と共に天使が現れ(2:9)、救い主の誕生を告知し(2:11)、お前さんたちが救い主を見つけるのじゃ(2:12)と厳かに告げた。外套かぶってぼんやり野宿する羊飼いだっただが、驚くほど勢いづき(2:15)、ベツレヘムへ「急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた(2:16)」。羊飼いらは興奮していたので、見ず知らずの者が真夜中に訪れることを、非常識だと思に至らなかった。

羊飼いらは、天使の話と実際に見た幼子救い主のことを人々に知らせた(2:17)。しかし「聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った(2:18)」。もっと率直に言えば「バカバカしい、夢でも見たんじゃないかねえか」と唾吐く調子。家畜小屋の救い主、被差別民の羊飼い、という世の最底辺。そこから天使と天の大軍の賛美(2:13)が語られても、まるでかけ離れた「たわごと」で誰一人として信じない。

翌朝、羊飼いらは昨夜の事を真顔で人々に伝えたが、誰も取り合わない。ヨセフもこうした常識人かもしれない。「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた(2:19)」。マリアは若く貧しく知識もないが、常識や先入観に捉われない柔らかさがあった。分らない事を分らないまま「すべて心に納めて」おく人だった。適度な理屈を早々につけないで、分らぬ事を思い巡らし続けられる人であった。この「思い巡らせ」は、自分の狭い領域を超えていく粘り強さであろう。

人々には相手にされなかったが「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりでだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った(2:20)」。どこへ帰ったのか。羊と共に野宿するあの原野(2:8)にだ。そういえば、乳飲み子の救い主を見つけたあの東方の占星術学者らも「自分たちの国へ帰って行った(マタイ 2:12)」。羊飼いや学者も、幼子イエスがキリストとなるその後を見極めずに帰ってしまった。最初に救い主に出会った彼らの使命は、ただこれだけか。いや、そうではあるまい。

羊飼いらは「神をあがめ、賛美していた(ルカ 2:20)」。羊飼いの讃美は「こだま」ではないのか。天使と天の大軍の賛美(2:13)は、地において「こだま」として響く。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ(2:14)」。この讃美が地上で開かれるためにクリスマスが起った。占星術学者らも東方の異国にあって、異教の仕方で、天の讃美を自分の地から発しただろう。「神に栄光、地の平和」。主の降誕、クリスマスは世の多様な「人間の根っこ」を横断していく命の響きなのだ。

「主が喜ばれるのは、焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。見よ、聞き従うことはいけにえにまさり、耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる(サムエル上 15:22)」。特定の宗教儀礼でも慈善でも奉仕でもない。ただ主の御声に聞き従うこと。「聞き従う」とは実際どういうことか。自分の場で、自分の仕方で、自分自身が主の声の「こだま」となること。

救い主に出会った羊飼いらは「神をあがめ、賛美しながら帰って行き(ルカ 2:20)」、「地には平和(2:14)」という主の声の「こだま」となった。地上で幼子イエスが響き、それを見聞きする私たち自身も響く。

人間同士は「こだま」 微笑めば微笑み返し 敵意は殺意で倍に返される 天と地もまた こだま  
地の憎悪は天でも響くのか 否 こだまにならない不調和 こだまが響かなければ愛と永遠はない

クリスマスおめでとうございます。今夕 5:00 から燭火礼拝をします。一度お帰りになってからご参加下さい。1/29(金)10時から大掃除、11時頃から餅つき。都合つく方はよろしくお願ひします。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳伝道所」で検索して下さい。